施設で看取り 不安解消を

介護職員向け 医師ら手引書作成

研修会

医療と距離感縮める 心のケア方法も学ぶ

八戸

老人ホームなど居住系施設での看取りに対する職員の不安やストレスを解消しようと、八戸市で「はちのへファミリークリニック」を営む小倉和也院長(44)らが、手引書「施設でできる在宅医療と看取り」を作成した。その冊子を教材に介護職員らの研修会を実施。並行して外部の専門家を招いて心のケアに関する研修も行い、地域での看取りの体制充実に努めている。

（舘花光秀）

手引書はA4判・90ページで、「在宅医療におけるケア」「がんと緩和医療」など4章からなる。小倉院長が「在宅医療助成 勇美記念財団」（東京都）の助成を受けて研究事業を行い、今年3月に作成した。同市の看護師や福祉施設関係者らが執筆に協力。在宅医療は、医療や介護にかかわるさまざまな職種の連携が欠かせないと強調している。

医療との心理的な距離を縮めるため在宅医療で使われる器具類を前に研修を受ける参加者

小倉院長らが作成した看取りの手引書

小倉院長によると、八戸市が行った調査で、施設での看取り実施を阻んでいる要因として、職員の知識・技能・経験がないことに関する不安を挙げる施設が多かった。また、看取りを行っている施設でも職員の心的ストレスに対する不安が大きかったという。

また、小倉院長が2015年度、市内101施設に行ったアンケート調査（回答62施設）では、既に看取りを行っている、いないにかかわらず、「医師や看護師との連携の仕方」「看取りに必要な医療知識」「家族とのコミュニケーションの取り方」などに関心が高かった。手引書はこうした要望に応える構成にした。

看取り研修会は1回2日間の日程で、県のモデル事業として行っている。8、15日に開いた研修会には、市内の事業所職員ら約20人が参加した。小倉院長をはじめ手引書作成に当たったスタッフが約2時間、終末期の身体の変化や医療職との連携の取り方、医療用具などについて解説した。

こうした看取りに関する知識の普及とともに小倉院長が重視しているのが、看取りに伴うスタッフの心のケア。「ストレスから抑うつ状態に陥ったり、休職・退職に追い込まれるケースもある」ためだ。18日には心理療法に詳しい田代順・山梨英和大教授(60)を招いて研修。参加した看護師ら約10人が「ナラティブ・セラピー」という方法について学んだ。

高齢化に伴い今後、施設での看取りは増えるとみられている。小倉院長は研究事業の報告書で、親族の死と向き合ったことすらない世代にとって、施設利用者の死を職業上の責任として担うことには計り知れないほどの不安と恐怖が伴う―と指摘。「研修を通して看取り体験を共有し、利用者が最後まで自分らしく生きることを支えていける地域にできれば」と話す。

研修会は、事業所などから要望があれば随時行う予定。問い合わせは同クリニック（電話0178(72)3001）へ。

五戸

松尾リサさん100歳 長寿たたえ祝い状 町が贈る

五戸町はこのほど、前日の20日に満100歳を迎えた同町の松尾リサさんに祝い状などを贈り、長寿をたたえた。

松尾さんは1916（大正5）年、同町生まれ。農業を営みながら子ども1人、孫3人、ひ孫5人に恵まれた。同町に住む長男・光政さん(67)の自宅で暮らしている。光政さ

家族から

ers）」